

パネル

観的なものとして認められているのに対して、神学の出発点となる経験は、信仰のように主観的なものにすぎないと考えられている。したがって、両者はその出発点の段階で別次元にあるため、対話の地平など開かれていないように思われる。

そこで神学者のパネンベルクは、「すべてのものを神との関係において考える」という視点を取り入れる。つまり、自然科学の対象となる自然現象を神との関係において考え、その説明が客観性を持つと認められる場合には、神学が科学と同じ地平に立っていることが証明されたとするのである。ここでは神の存在が前提されているわけだが、これを一種の仮説として用い、その説明が客観性を持つことが示される範囲において、その仮説の正しさも認められると考えるのである。つまり、科学と神学は扱う対象が同じであるが、そこで用いられる仮説が異なっているということになる。

しかし、ここで仮説となっている神の存在は、信仰者の主観的な経験にすぎず、自然科学が用いる仮説と同等に扱うことはできないのではないか、という反論が考えられる。自然科学において前提とされる自然現象の存在は客観的なものであるのに対して、神の存在は主観的であるから、仮説としての立場を要求できないように思われる。しかし、自然科学は自然そのものではなく自然現象（自然の現われ方）を扱っているものであり、自然の現われ方そのものは主観的な認識にと言わなければならぬ。したがって、その自然現象を前提にすること、神の存在（これも神の現われ方にすぎない）を前提にすることは同等の仮説ということになるのである。自然現象が客観的であ

ると考えるのは、我々が目の前にある事物を知覚するときに、私以外の他者によっても同じ事物が同じように知覚されているはずだという前提があるからである。しかしこの前提には何の根拠もない。根拠がないにもかかわらずその前提が疑われないのは、我々がその前提に基づいて生活していても不都合を感じないからにすぎない。もし不都合が生じた場合には、その前提がただちに怪しいものとなるのである。

これと同じことを神の存在（現象）にあてはめると、現代においては神の存在を前提にして生活すると様々な不都合が生じるということが分かる。近代科学の成功によって決定論的な自然の見方が当然のこととして受け入れられたために、神の存在が不要なものになってしまったことも、その不都合の原因の一つであろう。ということとは、そのような不都合を取り払うことができれば、神の存在を前提にした議論が科学理論と同じ地平に立つことを妨げるものはないことになるだろう。したがって我々の課題は、その不都合を取り払うための新しい思考の枠組みを提示することになる。

美のアイデアと自然の神学

—— プラトン、数学、キリスト教 ——

落 合 仁 司

神を語ることに於いて、譬 parable あるいはその構成要素である隠喩 metaphor は不可避の方法である。何故なら神を

見たものは誰もおらず、神は何か他のものによって譬える他には語りえないからである。

隠喩あるいはそれを構成要素とする譬話は、あることに従来そのことには述語付けられない述語を付与することによって、その述語の新しい意味すなわちあることの隠された属性を発見する試みである。言い換えれば隠喩あるいは譬話は、あることに従来そのこととは異なる範疇に属する属性を見出す試みに他ならない。言うまでもなくこの隠喩理解は、ポール・リクールによる「生きた隠喩」の理解である。

したがって隠喩は、現前する述語の背後に隠された新しい属性を発見する試みなのであるから、現前の背後に隠された新しい真理を顕わにするプラトン以来の形而上学と軌を一にする。

「隠喩的なもの *metaphorique* は形而上学 *métaphysique* の内側にしか存在しない」のである。

しかし隠喩は、あることに異なる範疇の属性を付与する試みなのであるから、差異性と同一性を共に保持せねばならない。ジャック・デリダの言うような階層秩序的二項対立すなわち差異性のみではあることに属性を付与することにはならず、逆に現前と真理の同一性のみではそもそも隠喩にならない。それゆえ隠喩的なものすなわちプラトンの形而上学に対するデリダの批判は必ずしも適切でない。

近代においてプラトンの形而上学はデカルトの数学に譬えられる。何故ならデカルトの数学は、現前する代数方程式の隠された意味として幾何図形という新しい属性を発見する試みだからである。現前する代数は真の属性としての幾何の隠喩なのである。

ある。

デカルトの近代は二一世紀の現代もなお未完であり続けている。現代の最先端の数学である代数幾何において、アンドレ・ヴェイユはイデアルという現前する代数の隠された新しい意味として代数多様体という幾何を見出し、さらにアレクサンドル・グロタンディークは可換環という隠喩の真の属性としてスキーム *scheme* を顕わにした。隠喩は現代数学さらには現代科学を革新し続けるモデルに他ならない。

私の数理神学という試みも、たとえば位相空間という数学を神の隠喩として考える試みの他ではない。神を位相空間であると述語付けることによって、位相空間の新たな意味を発見し神の隠された属性を顕わにする試み、そのことによって神の愛あるいは共苦 *compassion* とは何かへのより一貫した深い理解に導かれる試み、それが数理神学である。数理神学は、現代人に理解可能な言葉としての数学によって語られた、神の新しい譬話なのである。

境界の脱構築

——「生物学的統制の時代」におけるキリスト教——

金 承 哲

ロスリン研究所によって生まれた「クローン羊ドリー」(一九九七年) が引き起こした神学的・倫理的論争の要諦は、単に